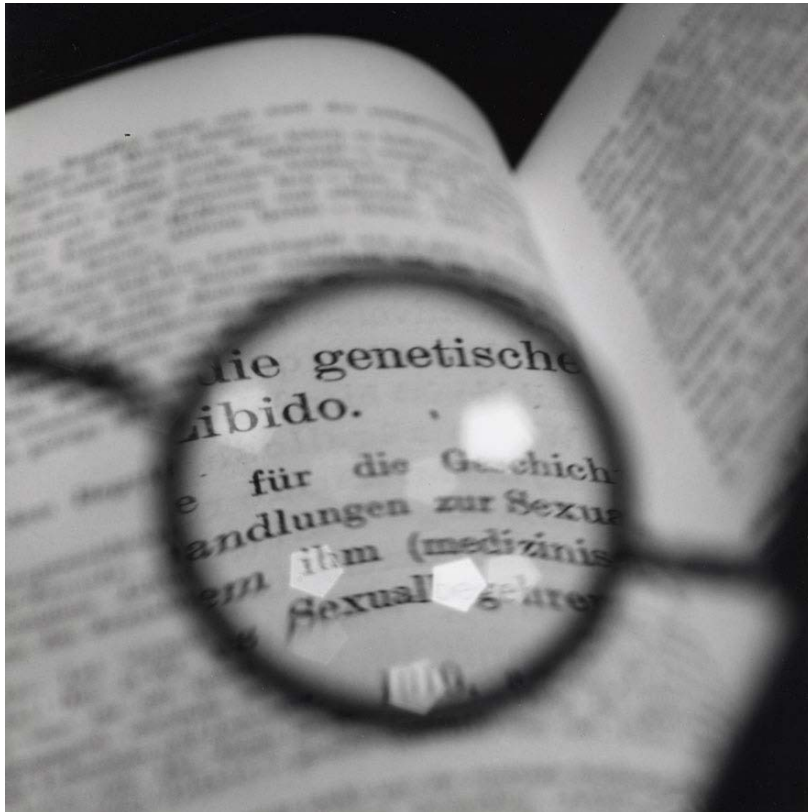


2021年7月17日

物質に宿る記憶を手がかりに過去と現在の関係性を考察。
過去を捉え直す9名のアーティストによるグループ展「動く過去」を開催。



米田知子《フロイトの眼鏡 — ユングのテキストを見る II》1998, Copyright the artist, Courtesy of ShugoArts

KOTARO NUKAGA (天王洲) は、2021年8月7日(土)から9月11日(土)まで、9名のアーティストによるグループ展「動く過去」を開催いたします。

KOTARO NUKAGAは、長野県軽井沢町に隣接する御代田町に今年3月に開業したオーベルジュ「THE HIRAMATSU 軽井沢 御代田」のラウンジやレストラン、客室のために作品をコーディネートしました。「記憶と出会う滞在」をテーマに、御代田の歴史や土地の持つ記憶を丁寧に掘り起こしながらキュレーションを行い、オーベルジュの敷地から出土した縄文土器から現代美術まで幅広くご紹介しました。この度の展覧会では、オーベルジュのためのコンセプトを元に、記憶を媒介とする過去と現在の関係性について、9名のアーティストの作品を通してさらに考えを巡らせます。

私たちは流れる時間のどこに存在しているのでしょうか。時間が不可逆で一方のみに向かう矢のような存在であるとするならば、私たちは事象の連続性の中で常に新しい未来と直面しており、過去と呼ばれる矢の軌跡には、膨大な出来事集積が残されていきます。縄文人が残した集落跡や土器はそこに歴史が存在する事を物語り、どのような芸術作品も同様に全て過去に属するものと言えるでしょう。同時に私たちはなんらかの(ア・プリオリであれ、経験に基づくものであれ)記憶がなければ、目の前にあるオブジェクトをいま認識する糸口を見つけることは出来ません。対象の表層は捉えられても、質や価値は過去の記憶に基づき主観的に判断されます。つまり、現在を認識するということは、過去を参照し続けることと言い換えられるのかもしれませんが。芸術作品を、ある時点での作家の思索を記憶させた物質と捉えれば、作品に宿る記憶を丁寧に紐解いていく時、物は物以上の何かを語り始めます。そこには鑑賞者の経験や情動に揺さぶりをかける複層的な仕掛けが潜んでおり、過去についての新しい解釈は常に運動の中にあります。

展覧会に名を連ねるアーティストたちは、実に多種多様です。歴史的建造物、古い街並、店先、庭園、そこに住まう人びとなど、変わりゆく「古きバリエーション」を丹念に記録した近代写真の父、ウジェーヌアジェ。満月の光を使って長時間露光し風景を写しとった写真シリーズなどを通じて、時間の進行に変化を与える作品を発表してきたダレン・アーモンド。近代建築の父と称されるル・コルビジエと現代音楽家クセナキスの共作でリヨン郊外に位置する傑作、ラ・トゥーレット修道院で捉えた光のイメージを発表する石塚元太良。カラー写真をセ

ピア色に転化し、かつて写真の中にあつた色彩を額縁にペイントする。ユニークな手法で認識について再考する磯谷博史。様々な再生プロジェクトに携わりながら、作家が制作を終えた後も表現の現場として存続する「風景芸術」をテーマに、1970年代から精力的に作品を発表し続ける田窪恭治。メディア間や支持体自体に存在する「ずれ」を通して、目の前にある対象のあり方をひとつひとつとどめず、流れた時間や空間をめぐって内包し得られる多様な図像を丁寧に浮かび上がらせる、田幡浩一。空気や光を取り込んでその場のエネルギーを表現する作品が高い評価を受け、近年では建築やファッション、デザインなどジャンルを横断した活躍を見せる三嶋りつ恵。ジャーナリスト的な視点を交えながらも、見る者に自由な想像や解釈の余地を与える暗示的な作品が、国際的に高く評価されている米田知子。シュルレアリスム運動に加わり、写真を中心に絵画やグラフィック、実験映画など多様な表現手段を通じて才覚を表し、当時は代表するアーティストとして現在も語り継がれるマン・レイ。表現方法は様々ですが、過去を捉え直し、解釈の余白を残すアーティストたちと言えるでしょう。

「動く過去」と題した本展ではこれらのアーティストの作品に加え、縄文土器や、土器片を展示します。土器や美術作品も、それを制作した者の記憶を留めるという意味においては変わらぬ性質を持つものです。データでの記録が当たり前である現代の情報社会の中で、本展は土器や美術作品を通して物質に宿る記憶を紐解いていきます。過去と現在という時空の往来を感じただけですと幸いです。是非ご高覧ください。

[開催概要]

「動く過去」

会期：2021年8月7日（土） - 9月11日（土）

開廊時間：11:00-18:00（火-土）

※日月祝休廊

※国や自治体の要請等により、日程や内容が変更になる可能性があります。

[会場]

KOTARO NUKAGA（天王洲）

〒140-0002 東京都品川区東品川1-33-10 TERRADA Art Complex 3F

アクセス：東京臨海高速鉄道りんかい線「天王洲アイル駅」から徒歩約8分

東京モノレール羽田空港線「天王洲アイル駅」から徒歩約10分

京急本線「新馬場駅」から徒歩約8分

[アーティスト]

ウジェーヌ・アジェ [Jean-Eugène Atget]

1857年フランス南西 ボルドー近くの村で生まれ、1927年パリにて没。当初俳優を目指して活動を行うも挫折。その後、モンパルナスに住み、当時その地域に多く住む芸術家に資料提供を行い、稼ぎを得るために写真を撮り始めた。以降、30年ほどの間に約8000枚の写真を残した。その作品の多くは、アジェの死後に見出され、今では当時のパリの様子を伝える貴重な資料ともなっている。作品を支えるアジェの視点は高く評価されるにいたり、近代写真の父とも称される。

ダレン・アーモンド [Darren Almond]

1971年イギリス・ウィガン生まれ。ウィンチェスタースクールオブアートを卒業。ロンドンを拠点に活動を行う。フリップ式時計や、月光による長時間露光を用いた写真シリーズなどを通じて、時間の進行に変化を与える作品を発表してきた。北極圏、シベリア、比叡山の秘境など遠隔地に赴き撮影されている。世界の異なる風土、過酷な自然環境と人間生活の現実とに向き合った作品は、様々な国で発表されている。

石塚元太良 [Gentaro Ishizuka]

1977年東京都生まれ。写真家。8x10などの大型フィルムカメラを用いながら、ドキュメンタリーとアートの間を横断するように、時事的なテーマに対して独自のイメージを提起している。近年は氷河、パイプライン、ゴールドラッシュなどをモチーフにアラスカやアイスランド、パタゴニア、オーストラリアなどで独自のランドスケープを撮影。初期集大成ともいえる写真集『PIPELINE ICELAND/ALASKA』（講談社刊）で2014年、東川写真新人作家賞受賞。また2016年、Steidl Book Award Japan でグランプリを受賞し、ドイツのSteidl社より新作の『GOLD RUSH ALASKA』の出版が予定されている。

磯谷博史 [Hirofumi Isoya]

1978年東京都生まれ。東京藝術大学建築科を卒業後、同大学大学院先端術表現科および、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジアソシエイトリサーチプログラムで美術を学ぶ。彫刻、写真、ドローイング、それら相互の関わりを通して、認識の一貫性や、統合的な時間感覚を再考している。国内外のグループ展でも様々な作品を発表しており、その作品はポンピドゥー・センター（パリ）やサンフランシスコ近代美術館などにもコレクションされている。

田窪恭治 [Kyoji Takubo]

1949年愛媛県生まれ。1975年パリ青年ビエンナーレ、1984年ヴェネチア・ビエンナーレに参加するなど、活動初期より国内外で発表を行う。1989年には、フランスのノルマンディー地方に移住。廃墟寸前だった16世紀の礼拝堂を11年かけて再生するプロジェクトに取り組み、完成した「林檎の礼拝堂」は好評を博し、フランス政府から芸術文化勲章を授与された。日本に帰国後も様々な「風景芸術」を生み出すプロジェクトを実施している。

田幡浩一 [Kouichi Tabata]

1979年栃木県生まれ。2004年に東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業後、2006年に同大学大学院美術研究科油画専攻を修了。2011年より公益財団法人ポーラ美術振興財団在外研修助成などを得て、現在はベルリンを拠点に活動。動的な要素を含む絵画作品や、絵画的制約をもって構成される映像作品などを制作。近年発表している、絵画に「ずらし」を取り入れることで完成されるシリーズ「one way or another」は、注目を集めている。

三嶋りつ恵 [Ritsue Mishima]

1962年京都府生まれ。1989年にヴェネツィアに移住、2011年には京都にも住まいを構え、二拠点を往復しながら制作を行う。ムラーノ島のガラス職人とのコラボレーションにより、ヴェネツィアン・ガラスの透明度や粘度を活かした、周囲に溶けみながら光の輪郭を描き出す無色のガラス作品を制作。空気や光を取り込んでその場のエネルギーを表現する作品は、公共空間でのアートワークとしても評価が高く、近年では美術のみならず建築やファッション、デザインとジャンルを横断した活躍が続く。

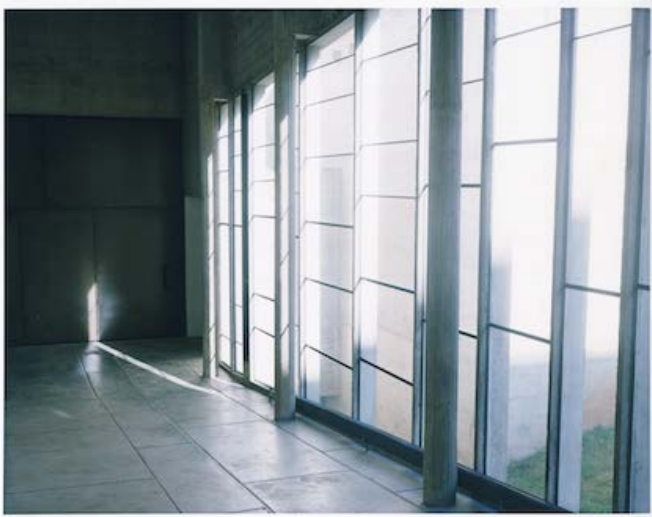
米田知子 [Tomoko Yoneda]

1965年兵庫県生まれ。1991年ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（ロンドン）修士課程修了。以降、ロンドンを拠点に活動を行う。土地や遺物に残された記憶と歴史をテーマに、入念なりサーチに基づき「見えるものと見えないものの間」を明らかにするような写真作品を制作・発表してきた。知識人が生前に使用した眼鏡を通して、その人物にゆかりのある文章や楽譜などを写す「Between Visible and Invisible」は米田の代表シリーズである。

マン・レイ [Man Ray]

1890年フィラデルフィア生まれ、1976年パリにて没。活動初期はニューヨークを拠点にするが、1921年パリへ移住。シュルレアリスム運動に加わり、写真を中心に、絵画やオブジェ、グラフィック、実験映画など様々な表現手段を通じて才覚を表し、当時を代表するアーティストとして現在も語り継がれている。とりわけ写真作品は極めて高い評価を得ており、歴史的にも貴重なものとなっている。

[作品]



石塚元太良《Ondulatoir #001》2017/2021



ウジェーヌ・アジェ《Port dans la rue Eau de Robec, Rouen》1908 1977



磯谷博史《影が光を生む》2020



《縄文土器》約 4700 年前

■お問合せ

KOTARO NUKAGA 担当：奥山

EMAIL: info@kotaronukaga.com URL: www.kotaronukaga.com

TENNOZ: TEL +81(0)3 6433 1247 / FAX +81(0)3 6433 1257